



育兒學 (續)

中村五六

●睡眠、幼児生れて後一二月の間は、食物の消化と、營養と、生長とに、全力を費してゐますれば、つまり外より見る所では、眠ると乳を飲むとの二様の時間の外はなきことになります。漸く月日を経て、感覺意識働き、始めて、醒めたる時もあるやうになります。故に此の時代にありては、睡眠に費す時間、又最も睡眠に適する時刻などの

注意は、餘り大切ではありませぬから、唯其の眠る位置と状態とにつき、心得べき事柄を申し述べませう。

幼児は最初より幼児自身の寢床に臥さしめ、殊に寒き折には、十分に被物を覆ひ置くの注意が要です。被物は軽く且つ暖かなるものにて、室内の温度に應じて、之を加減すべきは、申すまでもなきことであります。

我が國には幼児を暖かに保つためとして、母親が添ひ寝をいたす習慣があります。幼児は自ら體温を保つだけの力を持ちてゐますれば、被物さへ相當であれば、それには及びませぬ、しかのみならず不潔の空氣を呼吸し、又老人の添ひ寝などは、却て幼児の温を奪ひて宜しからず、且つ此の習慣續くときは之がために、母親などは、空しく時を

費すの弊を生じます、よりにて、獨り寢の習慣をつくるは、種々の利ありて害なきこととあります。

睡眠中は餘り明り過ぎて宜しからず、又空氣の流通はよくすべきなれども、風の吹き通す處は之を避けなければなりません。

睡眠時の長さは、已に申したる通りの次第なれば幼兒は唯乳を飲むために醒め、飲み終れば再び速に眠ります、諸器關が段々發達するに従ひて、活動の欲望を増し、眠る時間を減じますのが通例です。此等は天然自然に出づることとありますれば、母たる人の任は、よく注意して唯他より睡眠を妨げざるやう務むるのです。

既に眠る時と醒むる時との區別があるやうになりますれば、其の時は、成るべく規則正しかるべきことは當然なくてはなりません。一體に動物は

此等の時に關して實に規則立ちたるもので、各一定の時刻一定の時間眠るものであつて、人間程に亂雜の眠り方を致すものは多くはありませぬ。

睡眠不規則がちなるときは、母も子も、夜中よく眠る能はず、又健康に必要な休息をなすことが出來ませぬ、幼兒は眠り醒めたるときは、晝にても夜にても、乳を求めて泣き出すが多くあります、其の泣くのを休めしむるために、空腹であるなしに拘はらず、常に乳を與ふるときは、必要な眞の休息とはなりません。然るに一度泣く毎に乳を與ふる習慣をつくるときは、母の安息快樂は、幼兒の健康平安と共に見捨てねばならぬこととなります。乳を與ふれば、無論一時幼兒を静むるの利ありといへども、後日十倍の面倒失望の損あることは明かです。

哺乳睡眠時を正しからしむるやう務むる間に、夜分は特に定まれる睡眠の時なれば、此時に眠を妨ぐることなきやう手順をなし置くこと肝要です、幼児は年月を積み身體も強くなるときは、此等の注意は猶更のことゝなります。齡二三年までの幼児は、夜眠のみならず、午睡を要するものでありますれば、晝の真中に二三時間眠る習慣をつくること肝要です、午睡の時刻後るときは、多くは肝腎の眠るべき夜分にも、宵の間はよく眠られざるとありて、其の身に害を及ぼすのみならず、他にも迷惑を掛くることとなります。神経質の幼児には、三四歳若しくは其以上の齡に至るまで、適當の午睡は特に効益を與ふるものと申しませぬ。

晝にても夜にても、幼児が眠りたるときは、光

と響とは避くべきものとなりてゐます、たとひ、眠を醒すほどでなくとも、神経に感動を與へますれば、熟眠を妨げ、元氣回復すること出来ぬものでありませぬ。然るに多くの人は、これに違反せる行を致しまして、幼児が目を醒さざるかぎりには、其の傍にありて、喋々話をするこゝも、がたがた響を起すこゝも、決して何等の影響なきものと思つてゐます、これは、有害なる誤解といはなければなりません。

食物胃中に満ちて、今や消化始めんとするときの睡眠は、不穩なることは當然のことであつて、時によりては全く眠り得ざることがあります。それであるから、幼児に十分に乳を飲ましめて直様眠らしむべからざることは、一般の規則となりてゐます。生れて後一ヶ月ばかりの間は、乳を與へ

て直に眠ることは、よくあることですが、この時代にありては、一時に飲む乳の分量も極めて少くありますから、さほどの害はありませぬ、豫め注意を要するのは、それより後の時代です。

幼児睡眠の時間は、各兒の身體の組立、健康に關係致しますれば、一定の時間を示すことは出來ぬ位ですが、眠れること静にして、醒めたるときおとなしき折には、取扱上大なる過失なきものと認め、同年配の他兒に比して、猶一時間多く眠りしとか、少く眠りしとか心配するに及びませぬ。之に反して、眠ること静穩を缺き、醒めて泣き、又はぢれるなどのことあるときは、食後直に眠らしめしとか何とか、取扱上不注意の廉ありしことの保證が出來ます。

母親を苦しめ、乳母を煩はすことは、幼児の眠

らざるに越すものは餘りありませぬ。故に如何にもしてよく眠らしむる方法を待たいのは、皆望む所でありませぬ。健康なる幼兒は、其の取扱適當なるときは、常に相當の時に眠るものであります。若し氣高ふりて休まざるときは、斯くなしたる原因あることと認め其の原因を見出し、之を際く工夫を致さねばなりません。若し又、之を見出し得ざるときは、健康を損じたるものであつて、眠らざるは病苦によると認めて相違ありませぬ。此の場合に於ては、早く醫師の忠告を求め、健康を回復する方法を取るべきです。よく眠らざるとして薬品を服用せしむるが如きは、斷じて禁ずべきことであります。

花又は其の他の強き香を有するものは、幼兒の神經を刺激して却て害あるものでありますれば、眠れるときにはこれらを遠ざくること必要です。

寢具は之を清潔にして、幼児の床を離れたるときはよく之を空氣にさらし、又時々日光にほすことは、幼児の健康を増し安眠を得しむる有効の方法なることを忘れてはなりません。

靈柩の奥なつ、しや親の顔

兒童研究法

文學士 松本孝次郎講演

兒童の視覺

先づ子供の視覺と云ふものはドウ云ふ原理で發達する者であらうかと云ふ一般を心得て置て、それから研究上の注意、研究法の問題と云ふものが能く其意味の判るやうになつて來るものであります、先づ最初に私は子供の視覺の事に就ては初め

て生れた子供は半ばは盲目的のものである。能く見えない、さうして凡そ七八歳頃までは幾分か遠視的になる。それから七八歳頃から通例になる。一般の教育を受くるやうになつてから、近視になりませんが、近視になるは十歳頃からソロ／＼始まる。大體よりはさう云ふ變化を経て來るのであります。此變化は大凡ドウ云ふ有様で進んで來るかといふ事を初めに御話を仕やうと思ふ。それで初めに自分からする事であらうが、歩く事でも耳で聴く事であらうが皆經驗を経て一人前の働さか出來る。物を見ると云ふ働さも矢張經驗の結果として起つて來るものと言はねばならぬ。初め三月ばかりの間は視覺が完全なものになつて居らぬ、それまでの間は何かがあると云ふ事は判つても、物體を辨別すると云ふことはできぬ。眼に着き易さ